



第57回「おかねの作文」コンクール

特選 J-FLEC 理事長賞

お金の本当の意味とは

東京都・成城中学校 3年 江口 寛冬

「お金」とは、単に欲しいものを手に入れるための道具でしかないと思っていました。労働の対価として得るもの、そしてそれを使い果たす。実際に稼いだことはないけれど、そんな単純な図式なのだろうと漠然と考えていました。自分に関していえば、お金は娯楽や所有欲を満たすためのもの。例えば、文房具やゲームソフトを買うために、報酬目的で成績を上げたり、家の手伝いをしたりする。それは、お金に対するある種の交換行為であり、自分の時間の対価としてお金を得るというシンプルな関係性で成り立っていました。

しかし、今年の夏、イギリスでの寮生活を体験し、お金に対する価値観は大きく変化します。憧れのイギリスの寮生活では、世界中から集まった個性豊かな仲間たちと限られた予算の中で共同生活を送りました。みんながそれぞれの国の文化を持っており、お金に対する価値観も様々です。親からの援助をもらい糸目を付けず湯水のようにお金を使う人もいれば、自分で稼いだバイト代を数年かけて少しずつ貯めて参加している人もいました。本やインターネットで見聞きした知識としてそういう世界観があると知っていましたが、実体験を通じて、自分にとって本物の知識となりました。

寮の食事は毎日同じようなメニューで、日本の自宅のように好きなものを好きなだけ食べることはできません。語学授業の後の自由時間に友達と街に出かけたいと思っても、円安の影響もあり予算を考えると二の足を踏んでしまうこともありました。日本を出国する前までは、ある程度の予算は立てていますが、現地での物価の上昇や円安の影響により日々のお金の使い方を考えなければなりません。当初計画していたような頻度で外食をしたり、お土産をたくさん買ったりすることは難しく、我慢することも多々ありました。しかし、限られた予算の中で工夫して生活をするうちに、お金は単に物欲を満たすための無尽蔵の道具ではなく、自分の欲と向き合い、深く思考し、必要不要の取捨選択の経験

を積むための手段でもあると気づきました。

また、友達と話し合いをし、協力して交流会イベントを開催して世界の様々な文化に触れる機会を設けたり、近場の公園でピクニックを楽しんだりするなど、お金をかけずに楽しめる方法もたくさん見つけて実行しました。

これらの経験を通して、お金とは物よりも経験や思い出を買うためのものだと実感できました。

帰国後お金に対する考え方が変わった私は、今までの自分とは異なるお金に対する価値観を持つ人々がいることに気がつきました。

大叔父は貧困を理由に進学をあきらめた経験から、いざというときにお金が足りないと困るといふ危機感を常に持っていて、お金を貯めることに喜びを感じ、質素な生活を送っています。大叔父にとってお金は使うものではなく、貯めるものです。

それとは逆に江戸時代の庶民を表す「宵越しの銭は持たない」という言葉があります。これはせっかちな江戸っ子の気風を表す言葉になります¹⁾。しかし、江戸は現在の東京よりも火事が多く、火災保険や貯金ができる金融機関などはありません。一夜にして家財全てを失う恐れがあったため、このような風習が生まれたといわれています²⁾。江戸っ子にとってお金は貯めるものではなく、毎日稼ぎ、使い切るものだったのです³⁾。

これらの異なる価値観に触れる中で、私はお金に対する考え方が多面的であること、それぞれの育った環境や価値観、そして人生の目標によって異なることを知りました。そして、お金の使い方次第で生活の質が大きく変わることを実感し、お金に対する感謝の気持ちも深まりました。これらの経験は私の人生において、お金をより賢く使うための大きな転機になったように感じます。

お金とは、単なる道具ではなく、自分自身を成長させるための羅針盤のようなものです。人と人との繋がり^{つな}を深めたり、自分自身を成長させたりするための大切なツールとして、よりよい使い方を模索し続けていきたいと思います。

(注)

1) 新村出編『広辞苑 第六版』 岩波書店 2008年1月

2) 安藤優一郎著『大江戸の娯楽裏事情 庶民も大奥も大興奮!』 朝日新聞出版 2022年7月

3) 北村孝一編『ことわざを知る辞典』 小学館 2018年11月